

平成二十六年二月五日発行
通巻一〇七四号(毎月一回一日発行)

京鹿子

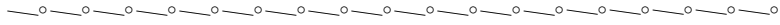
2月号

豊田都峰

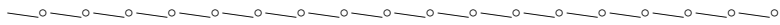
心響集 その二

ひとすぢの日の草紅葉みやびとす
古池の一石として紅葉盛る
返り花おそすぎし日へ手をかざす
夕もやを脱ぎそむ冬木奥ともし
冬木立月の丘へとかげきざむ
半身に月はりつけて冬木立





朝もやを脱ぎて境の冬木立
狐火や卑弥呼の墓の裾あたり
鎌月をかかげて森に梟棲む
うぶすなの祈りの数の冬芽かな
神集ふ宮のひなたは冬芽季
拍手はお礼ごころに冬うらら
はばかりなくうつ拍手に冬日立つ
北風や窓をひとつに昨日今日



—丸山佳子作品—

鴛鴦ねむる

丸山佳子



冬ざれの風吹きとほし鴛鴦ねむる
鴛鴦ねむるなべて希ひはとげしごと
人を戀ふ寒の孔雀のつぶらの瞳
孔雀翅をひらき凍園あかるうす
秃鵠の寒の亡者のごとからび

秀華採集

惜秋や指揮棒は今ティンパニーを

木戸 渥子

心の高ぶりの発露の一步前の状態を「指揮棒は今」と的確に描写してゆるぎがない。そして「ティンパニー」と打楽器を指したあたりもたいへん具体的でよい。

露草はギリシヤ王子の耳飾

佐々木 紗知

閻王に供へて今年米一斗

津野 洋子

前句のたとえのロマン性はよい。後句のなにはともあれ供えた対象がほほえましい。比喩にしる発見にしるは特殊なものほどよく、佳句を生む。



— 近 詠 —

若菜の野

鈴鹿 仁

白きもの岳にいただき若菜の野
神麓や門松立てば風青し
はつこ糸の真中の風のやはらかし
何もかも生きるすべ知る寒夕焼
狗あそぶ一茶の軸の初座敷



— 近 詠 —

仏手柑

和田 照海

藍 建 て の 機 嫌 の い ろ や 昼 ち ろ ろ
海 峡 は 飛 び 島 日 和 仏 手 柑
小 春 波 止 緩 み て 潮 木 啞 へ を り
牡 蠣 船 を た で と つ ぷ り と 闇 満 ち る
星 辰 も よ み 鮫 鱈 の 網 下 ろ す



神麓集

炉開きて

藤岡紫水

木枯一号死は一片の紙で足る
十一月北斗ひたすら傾けり
炭継いで気負ひも新たな炉を開く
三代の媪が抱きし茎の石
大根焚き法話は耳を通り抜け

春隣

竹貫示虹

料峭やきのふよりけふあたらしく
死ぬときは死ぬがようそ春隣
音もなく積もる齡や春の雪
鳶の笛雲よりこぼれ名のみ春
鈴ふるや生駒の眠りまだ覚めず

松田都青

丁寧紙幣伸ばして夜業果つ
欠伸する程の長生き秋気澄む
長き脚ばかり並びて車窓秋
百年の毛見帳積まれし蔵の中
秋灯し晩学いまや何をせん

そぞろ寒

北川孝子

身構への二、三歩ゆらぎ雪ぼたる
反古となる指切りひとつそぞろ寒
正論にふかく頷き露小寒
譲られし木椅子のぬくみ神無月
聞き役のいつか語り手秋更くる

梟

丸井巴水

梟啼く通夜堤燈の灯りのみ
ひとをはくビルに挟まる秋の虹
てかてか洗濯石の紅葉晴れ
啼く犬へ疑似餌一本秋の雷
満月や影絵の鬼が吼えて出る

冬ざくら

塩貝朱千

いつも夢師と歌ふとき山粧ふ
冬ぬくし天台座主とゆるキヤラと
声明に耳を澄ませば冬ざくら
散もみぢ呂律まはらぬほどに積み
濃く淡く生きてみませう冬桜



京鹿子集

豊田都峰選

惜秋や指揮棒は今ティンパニーを

月を待つ父の胡坐はわたしの巢

赤い羽根付け月並な挨拶を

忘れたのはしやつくりの所為鴟の贅

露草はギリシヤ王子の耳飾

突堤を雲とでてゆく秋祭

夕ぐれは暗きへゆけり冬の蝶

風景の両端がまづ冬に入る

閻王に供へて今年米一斗

鍛冶の火を打ちて四代万年青の実

京都 木戸 渥子

千葉 佐々木紗知

京都 津野 洋子

振り向けば又遠会釈秋の暮

神留守の険しくひかる閻魔の眼

冬隣り茜の雲も早仕舞ひ

秋の薔薇ひつそり笑ふ澄みし赤

薄明かり高木の黄葉囲む部屋

黄落や風のポエムに舞ひ散りて

移籍して新たな白衣秋の水

秋フェスタ祖国の手ぶり忘れ得ぬ

秋フェスタ誇らしげに舞ふ留学生

陶器市口に優しき湯のみ選る

オハイオ 水谷 貞子

アリゾナ 伊吹 之博

岩尾根を背に下り来る溪紅葉

札幌 野村 鞆枝

ヤツホーと呼び交はす子等溪紅葉

移る季に一番名乗りななかも

旅三日帰りし庭の柿紅葉

連休や野山の錦今盛り

秋の田の段々にして休耕田

山粧ふ空青くして音も無し

七竈ランドゴルフに花添へて

秋場所や同郷力士に力入れ

廃寺なる庭華やぎの山茶花か

出先とて早る気持のつるべおとし

菊まつり丹精を聞くとほしく

共白髪夫が手を取る紅葉道

秋雨の戸口の孫に笑美返す

風吹けばドミノ倒しや芒の穂

芒の穂車両に触れて五能線

錦もみぢ置き忘れたる影法師

稲つるびそここ震災余波ありなごり

大倭は秋海底に人棲みはじめ(臨海水族館)

水族館の魚よ秋愁とは別の世に

秋の渚行くやう回る水族館

四角い海に壁ある魚の秋思かな

鯛の目に私はきつと宇宙人

水澄んでかき乱したくなる真昼

御座します幣のお岩木稲を刈る

刈田焼く出稼ぎの日を指折りつ

秋うらら己が歩幅に山毛櫲の道

括らるるスワンボートや明日は冬

朝日まだ影をつくらず草の花

逢ひにゆく桜紅葉の向かう側

小春かなひとついただく泥だんど

近道を迷うてをりぬあをふくべ

現代娘脱いで秋日の花嫁に

ワインに酔ひ月に酔ひつつチチロ聞く

駅までの銀杏落ちぬて拾はざり

後から足音の憑く花野かな

秋深し指に残りし拇印の朱

宝物と坐禅くむ僧冬隣

秋冷や槌音すぐに風となる

夜が明ける一番列車にのるすすき

行くものはゆふぐれどきの秋の雲

ひんまがる陸にすむもの大蜻蛉

みちのべのすすきのなみにきみのかほ

栗の落つ懸谷の見ゆ神の庭

布川 孝子

高野 春子

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船橋 元橋 孝之

直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

さいたま 神田 惣介

渋川 東 秋茄子

酒田 藤波 松山